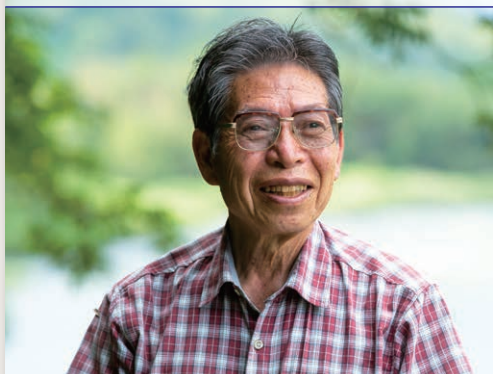


訃報

古賀邦雄さん逝去——本誌連載「水の文化書誌」擱筆の半年後に



山口県の佐波川にて（2021年撮影）



長い間、本誌で「水の文化書誌」を連載してくださった古賀邦雄さんが2024年（令和6）3月27日に亡くなりました。享年80。古賀さんには連載のご協力のみならず、当センターのアドバイザーとしても数えきれないほどのご助言をいただきました。古賀さんのご逝去を悼み、謹んでお悔やみ申し上げます。

古賀さんが水や河川、湖沼にまつわるさまざまな書籍や資料を集めることになったのは、水資源開発公団（現・独立行政法人 水資源機構）に勤めていたときに上司が発した「水にまつわる本を集めて整理してはどうか」という一言がきっかけだったそうです。

そして2008年（平成20）5月に私設の図書館「古賀河川図書館」を開きます。古賀さんが集めた書籍・資料は希少なものが多く、全国からさまざまな人たちが古賀さんのもとを訪ねました。編集部が初めて訪問したとき、足の踏み場もないほどの本の数

に圧倒されたことを思い出します。

2020年（令和2）3月、古賀さんは所蔵していた約1万2000冊を久留米大学御井図書館に寄贈されます。古賀さんは「立派な図書館がきちんと管理してくれるのでありがたいことです」と目を細めていました。古賀さんの蔵書は「古賀邦雄河川文庫」として公開されています。

坂本貴啓さんの連載「Go! Go! 109水系」の取材にもご同行いただくことが多く、お二人の会話から、そして古賀さんの川にまつわる史跡を見つける目の鋭さなどたくさんのお話を学ばせていただきました。

連載「水の文化書誌」を終える際に古賀さんにお話をお聞きしましたが、そのときに「ミツカン水の文化センターがすごいのは継続していることです。ずっと続けていただきたい」とおっしゃいました。その言葉を胸に、当センターはこれからも情報発信に努めてまいります。



（上）久留米大学御井図書館内に設置された「古賀邦雄河川文庫」。古賀さんが収集したさまざまな書籍・資料は後世に引き継がれる（下）古賀さんが愛してやまなかった筑後川提供：坂本貴啓さん



連載の最終回となった「水の文化書誌」の誌面（『水の文化』75号）。この号には「擱筆にあたって」という古賀さんからのメッセージも掲載

快報

沖 大幹さんが「ストックホルム水大賞」を受賞



「ストックホルム水大賞」を受賞した沖 大幹さん

当センターのアドバイザーを務める東京大学大学院工学系研究科 社会基盤専攻 教授の沖 大幹さんが2024年の「ストックホルム水大賞（Stockholm Water Prize）」を受賞したことが2024年3月22日に発表されました。

同賞は「水のノーベル賞」とも称される、世界でもっとも権威のある水関連の賞です。ノーベル賞の選考を行なっているスウェーデン王立科学アカデミーの協力によってストックホルム国際水研究所が決定したものです。ちなみに3月22日は国連が定め

た世界水の日にあたります。

沖さんはグローバルな視野から取り組む水文学の先駆者として知られています。世界的な水収支や仮想水の流れ、再生可能な水資源量の時空間変動に関する研究への卓越した貢献が評価され、今回の受賞となりました。日本人の受賞は23年ぶり3人目となります。

2024年8月の「ストックホルム世界水週間」の一環として王室による授賞式が行なわれ、記念講演も予定されています。沖さん、おめでとうございます。



一度は訪れたい「佐渡」

機関誌『水の文化』61号「水が語る佐渡」

いよいよ夏本番。夏休みに旅に出る方も多いと思いますが、まだ計画が固まっていない方にお勧めしたいのが、「佐渡」です。世界遺産への登録なるか、と注目の島ですが、水の観点で金銀山の採掘技術、農業技術、建築などを見ていくと、その優れた知恵や技術に圧倒されます。機関誌61号「水が語る佐渡」は旅のお供にぴったりですよ！冊子をご希望の方はHPからご連絡をお待ちしています。



2019年2月発行

皆さまからの感想、情報をお待ちしています！

『水の文化』77号のアンケートにご協力ください。機関誌『水の文化』をより充実したものにするため参考とさせていただきます。

回答はこちらから



<https://forms.office.com/r/ZUZKT2xKG3>

送付先の変更やお問い合わせはHPの「その他のお問い合わせ」もしくは下記へご連絡ください。

FAX: 03 (6784) 3056

編集後記

今回の取材では、島原と水戸に同行させていただきましたが、そのどちらにも水と共に生きよう、水と共に楽しもうとする人の工夫や努力があり、その人の営みが歴史と合わさっていくことで「水の文化」が生まれるのだらうと大変感慨深い想いでした。これからもセクターの名に恥じないよう、様々な人の営み、「水の文化」を読者の皆様にお届けしていきたいと思っています。(森)

泳ぎの歴史をたどる中で、水中で安全を確保しつつ、目的を達するための術であれば「泳ぎ」なんだと、視野が広がったと思います。速さを目的としない日本泳法には、様々な目的を達するための技術が満載で、実際に拝見できて幸せでした。水中で自分も「うたた寝」(p.48)ができたなら、もっと「泳ぐ」が楽しくなりそうです。(松)

子どもの頃からスイミングスクールに通い、泳ぐことが大好きです。もうスピード重視で泳ぐことはありませんが、それでもたまに海水浴などの機会があると心躍るのです。大人になるにつれ、日焼けしたくない、薄着になりたくない、泳ぎから遠ざかっていましたが、久しぶりに思い切り水の中で体を伸ばしたいと思いました。(飯)

最後に泳いだのはいつだったか。記憶をたどると、どうやら20年前、スキューバダイビングで水中撮影するカメラマンのお供で、海に潜ったのが最後のようだ。人生の半分近く泳いでいなかったとは恐ろしい。パソコンの奥から出てきた、フィンをつけ海を漂う自分の写真を見ていたら、久しぶりに自然の中で泳ぎたくなった。(秋)

泳げないし濡れるのが嫌。砂浜でただただ暑い思いをする。そんな印象の海に数年前、子ども連れの友人と行くことがあった。でもその日はなぜか、子ども用の小さな浮輪を無理やり装着して果敢に海へと向かう。身体の一部となった浮輪のおかげか、行ったことがない場所まで泳ぐのがとても気持ち良く、海への印象が変わる思い出になった。(力)

子どもの頃、泳ぐことが大好きだった。スクールには通えなかったで、市民プールに行っては平泳ぎっぽくもがいていた。中学校の水泳授業で25mプールを20往復したが腕と脚のタイミングがどうもおかしい。だから胸を張って泳げると言えないままだったが、取材中に「自己流でいいのか」と気づいた。水泳パンツを買いに行こう。(前)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化 第77号

ホームページアドレス

<https://www.mizu.gr.jp/>

発行

ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中埜ビル

株式会社 Mizkan

Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

発行日

2024年(令和6年)7月 初版1刷

企画協力 (氏名50音順)

沖 大幹 東京大学大学院工学系研究科教授

陣内秀信 法政大学名誉教授

鳥越昭之 早稲田大学名誉教授

制作

森田浩正

松本裕佳

久保悦史

飯野真奈実

編集製作

前川太一郎 編集

秋山健一郎 編集

中野公力 デザイン・撮影

蔵田 豊 デザイン

執筆

秋山健一郎 (pp.10-13)

佐々木 聖 (pp.6-9, pp.24-27)

手塚ひとみ (pp.20-23)

開 洋美 (pp.28-31)

前川太一郎 (pp.14-19, pp.34-35, pp.48-49)

撮影

大平正美 (p.8, p.15, pp.34-35)

川本聖哉 (pp.24-27)

中野公力 (pp.42-47)

藤牧徹也 (pp.16-20, pp.36-41)

渡邊まり子 (p.10, pp.28-31)

描画

わたなべじゅんじ (pp.8-9, p.33)

印刷

中埜総合印刷株式会社